



# かなであん

## 二つの気づきを味わう 親鸞聖人のみ教え

皆さんと仏教との縁はいつ何から始まったのでしょうか。

ほとんどの方は大切な家族の死に接した経験からだと思いますが、自分自身が命に向き合った病気が縁の方もおられます。

\* \* \*

『出家とその弟子』の名著で文豪ロマン・ロランを感激させた倉田百三は、生まれながらカリエスの持病を背負い、青春時代も寝たきりの日が続き、精神の鋭敏な彼は、世に何の貢献もできていない自分の存在意義を真剣に疑います。そして苦悩と自問の果てに、ふと「気づき」ます。そのことを『生活と一枚の宗教』という回心の記録に著しています。

**人間がこの世に生きているのは能力や徳性によるものではない。ただ許されて生きているのだ。そうでなければ人間はどうして動植物の命を頂戴して暮らすことができようか。許されていることだけが人間の生存の根拠であり、その根拠においてノーベル賞を受けるような賢者も、自分のようにベッドの上に寝ているだけの人間も何の差異もないのだ……。**

こう気づき、これを、“後ろを見る眼”が開けたと表現しています。このことは倉田にとっ

たとえば、私たちは空気がなければ一時も生きられません。そして、その空気は恵みであり人間が作っているものではありません。だからこそ、金持ちだろうと貧乏人だろうと、役に立つ人間であれその能力を失った人であれ、善人であれ悪人であれ、無条件に吸わせてくれる。まさに吸うことが許されているのです。

何気なく吸っているその空気も、太陽により、水により、さらに動植物の、またその生き死により、絶え間なく生成されているおかげです。科学的にその原理が解明されていても、人間には生命の源を創り出すことはできません。反対に壊してしまう傲慢さをもっている。それが真理です。

自分を生かし続けてくれている力に気づく、これが第一の気づきです。しかし、それだけでは「あそうか」の知識だけで終わってしまいます。その次に私たちが“第二の気づき”「そのことに気づいてなかった自分に気づく」ということができはじめて人となることができるという、これまた気づきです。

それもただ気づくのではない、“頭が下がる”ということです。頭を下げるならやろうと思えばできるでしょう。しかし、ほんとうに心から頭が下がることは簡単なことではありません

そのような私たちに「こういう自分であったのだな、恥ずかしいのは自分のことであったのだな」と頷かせて下さるのが親鸞聖人のみ教えです。

浄土真宗のお念仏のみ教えの寛容は、いつも初ごと初ごと、我がこと我がこと、「聞く、聴く」ことだとお聞かせいただくのは、まさに「気づく」という「気づき」の難しさと重要性に、それこそ「気づかされる」ものなのです。

\* \* \*

多くの宗祖の中で親鸞聖人ほど我が身の罪業を感じていた方はおられません。聖人が歩まれた「非僧非俗」のご一生は、出家独身であるより苦悩の尽きないものだったと偲べれます。家庭を持ち妻子を持てば綺麗事で済まない思いも起こり、また求道生活では家族にも迷惑をかけたでしょう。そんな日々の求道生活、家庭生活、在家生活のつくり出す罪へのおののきというべきものに真っ向から向き合い、偽善を恐れ、謙虚をもって全てのなりわいを思いやり、お念仏の仲間をみな同じく「御同業御同朋」と敬い合いながら、他力に生き抜かれ私たちに出示下さった生き方を、私たちはお慕いするのです。報恩講はそんな親鸞聖人のご法事です。また一つ我がことに気づかせていただけるでしょう。 合

## 宗祖親鸞聖人報恩講

日時

11月26日(月)

午前11時より

「真宗宗歌」

正信偈

法話

ご文章拝読

「恩徳讃」

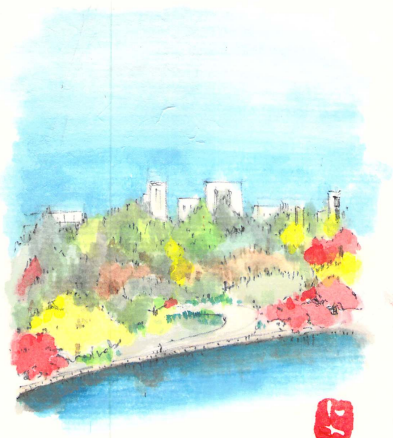
～\*～

おとき

今年は塩害の影響で紅葉は少し残念ですが、穏やかで澄んだ実りの秋を思わせるこの時期に、親鸞聖人のご法事、「報恩感謝」の「報恩講」は勤められてきました。

ご門徒と共々にお仏具のおみがきをして特別のお荘厳に設え、境内や参道を掃除し、収穫した野菜を持ち寄っておときを作るという「お待ち受け」の伝統は、華やいだ温かな思い出として身に染み込んでいます。これがご法事の本来のあり方だと味わえます。

どうぞお参り下さい。



仏教が生んだ日本語

【家風】

家風に合うとか合わないとかと聞けば旧体制の遺物のようであるが、今なお生きている語だ。一般的には、一家庭の生活様式や習わしを指して言うが、その環境は型や振る舞いだけでなく、考え方や言葉にも現れるもので、お寺にも同様に「寺風」がある。

本来は「臨済の風」というように、各師家が採る表現方法や弟子の指導の仕方を指して「家風」と言った。これは師から弟子へとおのずから伝わって、各系統の宗風、各門流の門風を形成し、その意味で家風という言葉は使われる。これは単なる風習とは違って、その道に練磨された者のみがおのずからそなえ、また継承することのできる風格のようなもので、単なる型の伝習というようなものではない。

価値観の変化で聞かれなくなった言葉に「威儀を正す」がある。この威儀は、仏教で大切にされてきたもので、行・住・坐・臥を四威儀というが、要するに日常の立ち居振る舞いのことである。その一つ一つが仏の法にかなっており、それを見たり聞いたりした人が心地よいと感ずることで威儀即仏法という。

今日、残念ながら僧はもとより、あらゆる職業に、人として「威儀を正す」ということが顧みられていないように思える。だから、本来その職につくべきでない人がなってしまうたり、変にオールマテイの人間をよしとし、それがその職を軽くして、ますます本質が失われていく。その一番の問題は、その自

編集後記

先月末から入院生活(20日現在)を余儀なくされている。胆石発作が発端で担ぎ込まれたのだが、厄介で長引いている。実感としては3年前の癌闘病より大変で、その主なものが「痛み」である。■絶対安静と絶食は、みるみる筋力を失わせ、体力もどんどん落ちる。

「痛い」という心身の「痛み」は非常に大きなストレスで、どこがどう痛いのかを的確に伝えることの難しさを痛感している。本人がそうなのだから、他に伝えるのは難しく、医者だっただけでわからないのではないかと思ってしまう。かといって、どうせわからないからと突き放されても不安で辛いものである。

■大災害が続く中で便利(?)に使われだした「人に寄り添って」も、何か綺麗事、他人事に聞こえて「そんな言葉で済むものじゃない」と叫びたかった人も多だろう。■痛みには、多くの経験に培われた対処が唯一本人をホッとさせる。人生いろいろな修羅場や経験はせずに済めば幸いだが、ほとんどの人がそういうわけにはいかない中で、辛さの経験は必ず他に役立ってきた。自分が経験したものの凄い「痛み」も他の人の理解に役立つだろうか。その時には「それはこうだ」などと断定し、訴えの言葉の鼻先を折ってはならないと思う。■耳は一方的な受け身な器官だ。人間にその器官が備えられている意味を考える。聴く(聞く)ということ、当然だがまず聞くことである。それをしっかり聞かないで、分かったような結論、ましてや誤った方向におさめて終わってはならないのは、お念仏のお聴聞への姿勢と同じだと、お任せの病室の天井が聞かせて